

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣

医

の

カ

ル

テ



51



くにか動物病院長
(黒部市新牧野)

國香 正寿

近年、猫の飼育頭数は犬を上回り、実際に臨床の現場でも猫を診察する機会が多くなっていると感じます。また、コロナ禍で家にいる時間が増えたことにより、新たにペットを迎えた家族も少なくないと思います。

猫の高齢化に伴い、病気で死亡した猫の約3分の1はがんが死因となつていますが、その中でも乳がんは若い時から正しい知識を身に付けることで、苦しむ猫を少なくできる病気です。

乳がんは猫のがんで一番多く、ほとんどはメスに発生します。性ホルモンと発生率は関連してお

猫の乳がん



乳がんのチェックを受ける猫

り、不妊手術に予防効果があることが分かっています。乳がんの発牛リスクは、生後6カ月未満で手術をするると91%、生後7〜12カ月で86%、生後13〜24カ月で11%低下できます。
生後24カ月以降では不妊手術の効果は認められません。中高齢になつてからでは乳がんの予防効果がなく、麻酔や手術後の回復も遅

れることがあるため、どのタイミングで不妊手術をするか、早めに家族や動物病院で相談しておくことがよいでしょう。
乳がんは10〜12歳で見つかることが多いのですが、被毛に隠れているため発見が遅れ、大きくなつてから初めて気付くこともありま

す。
猫の乳がんは80%以上が悪性でクしましょう。また、動物病院で発見されることも珍しくないもので、定期的に通うことも大切です。
乳がんが見つかった場合、基本的には手術が適応となることが多いのですが、慢性腎臓病や糖尿病などの基礎疾患がある場合、肺転移などが発見されることもあるため、治療の方法や手術のタイミングなどは適切に判断する必要があります。

しこりの有無チェック

あり、腫瘍を2センチ以下で発見できるかどうか、治療後の生存期間を左右します。早期発見がとて重要なので、目安として月1回、猫の機嫌がいい時に、しこりがなにかチェック

ります。
乳がんで苦しむ猫をゼロにすることを目的とした「キャットリボン運動」という活動があります。この運動のホームページでは乳がんに関する説明や飼い主によるチェックの方法などを掲載しています。獣医師と家族が一丸となつて取り組み、もっと多くの命を救うことができればと願っています。